

博士前期課程

開設科目の概要（令和7年度）

※変更となる場合があります。

「保育学」、「児童教育学」、「児童心理学」、「児童福祉・保健学」、「児童文化学」の5領域の科目に、共通科目と関連科目を組み合わせた編成となっています。修了に際しては①「必修科目」4単位②「選択必修科目」から「主領域」の基礎論を含む6単位以上③「主領域」から8単位以上④「他の4領域」と「関連科目」から計12単位以上、合計30単位以上の修得が必要です。

領域	必修	共通科目 (選択必修)	保育学 (選択)	児童教育学 (選択)	児童心理学 (選択)	児童福祉・保健学 (選択)	児童文化学 (選択)	関連科目 (選択)
科目	課題研究(修士論文)	保育学基礎論 児童心理学基礎論 児童福祉・保健学基礎論 児童文化学基礎論 児童学研究法特論(Ⅰ)(Ⅱ)	保育学特論 保育社会学演習 乳幼児発達心理学演習 保育史特論	児童教育学特論 児童教育社会学演習 比較児童教育学特論 生涯学習特論 生徒指導・進路指導 生徒指導・進路指導演習 児童発達学特論(Ⅰ)(Ⅱ)	児童発達学特論 児童発達学演習 児童発達学特論(Ⅰ)(Ⅱ)	児童福祉学特論 児童心理学特論 児童文化学特論 児童音楽特論 保育表現特論 保育表現演習	児童心理学特論 児童心理学特論 児童心理学特論 児童心理学特論 児童心理学特論 児童心理学特論	臨床心理学特論 学校カウンセリング 学校心理学特論 教育心理学特論 障害児心理学特論 児童臨床教育学演習
単位	4	2 2 2 2 2 2 2 2	2 2 2 2 2 2 2 2	2 2 2 2 2 2 2 2	2 2 2 2 2 2 2 2	2 2 2 2 2 2 2 2	2 2 2 2 2 2 2 2	2 2 2 2 2 2 2 2
通信	○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
面接	○		○ ○		○	○	○	○
幼専免		※	※ ※ ※	※ ※	※ ※ ※	※ ※ ※ ※	※	※ ※ ※ ※ ※ ※
小専免		※		※ ※ ※	※ ※ ※ ※	※ ※ ※ ※	※ ※	※ ※ ※ ※ ※ ※
心理学専攻					※ ※ ※ ※ ※ ※			※ ※ ※ ※ ※ ※

- 「幼稚園教諭専修免許状」を取得する者は、幼専免欄に※印を付された科目より24単位以上を修得すること。
- 「小学校教諭専修免許状」を取得する者は、小専免欄に※印を付された科目より24単位以上を修得すること。
- 「学校心理士(受験資格)」を取得する者は、学校心理士欄に※印を付された科目全てを修得すること。(要実務1年)

共通科目	共通科目	共通科目
[課題研究(修士論文)] 各学生が自分の研究課題をみつめて、これを修士論文として完成させるため、1年次から個別指導が始まる。指導教員の決定と同時に開始され、通信による助言・指導の他、Microsoft Teamsを利用したオンラインや大学に本校しての個別指導を受ける。また、1年次の末に「修士論文構想発表会」が、2年次の中頃には「修士論文中間発表会」が実施され、集団指導の形態で直接の指導を受ける。	[基礎論] 児童学はその性格上きわめて幅広い内容・領域を含むため、本学では、「児童学」を保育学、児童教育学、児童心理学、児童福祉・保健学、児童文化学の5領域とした。「基礎論」では5領域それぞれの領域名を冠した科目として開講し、各領域の基礎となる内容と研究方法を取り上げる。学生は各領域の「基礎論」等7科目から3科目以上を選択必修とし、児童学を構成する内容・領域と研究方法の特性、相違、関係を理解し、学生の研究主領域の位置づけの確認と今後の学習・研究の展望を図ることをねらいとしている。	[児童学研究法特論(Ⅰ)] 修士論文研究において、アンケート調査等で量的データを収集する予定の方は必須の科目。統計データ解析の主要な方法と統計学、統計学論文研究で活用できるようにします。統計データ解析の主要な方法(ノンパラメトリック法、実験計画法、多変量解析法)の意味と用途を理解し、研究の目的とデータの状況に応じてその中から適切な方法を選択し、実施する。また解析結果を正しく解釈し、表現することができることを目標とする。
共通科目	保育学	保育学
[児童学研究法特論(Ⅱ)] 実践での種々の現象を質的な研究方法を用いて探求することの重要性と楽しさを体験する。質的研究法の一つである修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて、理論特性、手順プロセス、分析テーマと分析焦点者、データの範囲と収集法、解釈プロセス、概念とカテゴリーの生成、継続的比較分析を学び、分析の要点を理解する。	[保育史特論] J. デューイの教育に関する代表的著作『学校と社会』『民主主義と教育』『経験と教育』を柱として、彼の教育思想とその発展について考察する。 現在の幼稚園教育は「環境を通して行う」ことを基本としているが、この「環境」をはじめ「経験」「興味と訓練」「活動的作業」「衝動・習慣・知性」など幼児教育理論において重要な基本概念を再考することを目的に考察を進める。	[保育社会学演習] 家庭、地域社会、園、情報・消費環境などの子どもの社会化環境を見ると、境界解体的変化が進行している。それに伴い、就学前教育や保育は大きく変化している。本演習では、子どもの社会化の過程と現状を踏まえ、その問題点を理解し、保育者や大人たちになにができるのかを考えていく。スクーリングでは、日頃の保育実践を社会学的に考察するために理論的・実践的な論文を取り上げて、討論を行う。
保育学	保育学	保育学
[乳幼児発達心理学演習] 保育学を研究する上で乳幼児の発達に関する研究はかなりのウエイトを占めている。そのことを念頭において、乳幼児期の子どもの発達の变化に伴う心理学的特性の理解や母子関係その他の環境を巡る発達臨床的問題に関する理解を深めてもらう。そして乳幼児が健全に育つことを願っての子育て支援のための発達心理学的アプローチのあり方について、理論と事例研究を交えて探りたい。	[家庭教育特論] 近年、わが国では、犯罪の低年齢化、不登校、学級崩壊と称される学校の荒廃化といった子どもを取り巻くさまざまな現象を背景に、「家庭教育」という一つの社会的現象のあり方に関心が高まってきている。なぜ、子どもたちの姿(行動)が問題とされると家庭教育のあり方が問われるのか。家庭教育をめぐる政策や議論の歴史から、この問いに対する答えを各自が導き出し、これからの家庭教育を展望する視座を培っていく。	[育児相談特論] 最近、育児に悩む親が増えていることが懸念されている。子育てに対する不安は、親子関係を歪ませ、子どもたちの成長に影響を及ぼすばかりか、幼児虐待などにもつながっていると言われている。 そこで、子育ての不安の実情や背景、家庭の変化、子どもたちの変化を捉えて、子どもたちの成長・親の子育てを支援していく方法としての育児支援事業、幼稚園や保育所の役割、保育者の役割を考えていく。

【参考資料】

Guidelines for Applicants

博士前期課程

博士後期課程

保育学	保育学	児童教育学
〔 保育課程特論 〕 今日、家庭、地域社会の教育機能が低下し、社会生活における望ましい習慣や態度、自発性、豊かな感情、物事に対する興味や関心、表現力等といった幼児期の人間形成の基礎を培うための体験の機会と場の確保が重要な課題となっている。 本講では、集団教育施設の場において用意されるべき発達に必要な体験としての保育内容について、人生の各時期に果たすべき特有の課題を踏まえながら考察を進める。	〔 障害児保育特論 〕 特別な保育ニーズのある乳幼児に対する早期発見、早期支援の体制について学び、これらの現代的問題への理解を深める。また、保育の現場における発達評価や園内支援体制を含めた支援方法、保護者の支援や小学校との接続の現状と課題について把握し、これらの課題について広く考察できる力を養う。	〔 幼児教育学特論 〕 乳幼児期の教育を、現場の実際場面から離れないようにするために、幼児教育学全般についての学習を、対象とする。特に子ども達を取り巻く環境は急変し、優れた専門性を有する保育者の養成が急務である。したがって、ここで論ずる内容は、幼児教育に関する教育目標、教育計画、保育室での指導、またそのための教育素材の準備等多岐にわたる。しかし、その保育室での教育は、最終的には幼稚園や、保育所の人間関係そして経営にも影響を及ぼすことを念頭においている。また、現実の幼児は家庭や地域において生活しているので、それらにも触れる。
児童教育学	児童教育学	児童教育学
〔 児童教育史特論 〕 児童観が歴史的にどのような変遷をたどったのか、いかなる観点が「観」形成の中心となっていたのか、さらに教育に関わる制度の歴史が教育観の発展にいかなる意味をもったのか。ここでは、主として子どもが大人に対して固有の価値を認められる存在になる近代以降の時期を対象にして、とくに公教育の発展をふまえながら、教育における子どもの位置づけを検討することを通して教育の可能性について考える。	〔 児童教育社会学演習 〕 社会の近代・現代化は社会構造を根本的に変化させ、日常的な家族形態や家族関係、子どもの生活環境や仲間関係、さらには学校教育の在り方を大きく変えてきた。この社会現実の意味を明確にするために、ここでは、社会変化と関連させて児童、学校および教員に関する問題を捉え、その主要な問題点をとりあげるとともに、その結果、子どもの生活世界や生活意識が現実にとどのように変容しているか、その実態を明らかにして検討する。	〔 比較児童教育学特論 〕 「比較児童教育学特論」は、文化と伝統の異なる諸外国において教育体制がどのようにして生まれ、変遷して来たかを相互に比較考察することによって、異文化間、あるいは国家間の教育現象の共通点と相違点を明らかにする。 また、日本と諸外国との教育、研究、交流の望ましい在り方を考究する。
児童教育学	児童教育学	児童教育学
〔 生涯学習特論 〕 生涯学習は、家庭教育・学校教育・社会教育すべてに関わる「人間形成」の基本的な学習である。21世紀の日本は、少子高齢社会の中、子どもから高齢者が生涯に渡って学び続ける事が求められる社会に急激に変化して来ている。特に、戦後生まれの団塊の世代（800万人）が65歳以上の人口に突入、全人口に占める高齢者の割合は、29.1%で世界一となった。子どもから高齢者まで生涯に渡り①自己を磨き②生活の豊かさ③職業能力開発が3本柱の生涯学習に対する理解を深めることを目標とする。	〔 生徒指導・進路指導 〕 学校における生徒指導・進路指導について、全般的に取り上げる。生徒指導は、児童・生徒の自己実現の基盤を形成するものであり、個々の社会的な適応上の課題の解決を援助する教育活動である。個と集団の両面から児童・生徒の健全な成長発達を促すために、教師が携えていくなくてはならない理論と方法について学習することを通して、児童・生徒への援助者としての役割を具現化できるよう学んでいただきたい。	〔 生徒指導・進路指導演習 〕 生徒指導・進路指導の学習の意義は、実践として表れることにある。具体的な指導場面において、指導する者には、状況的確な把握及び背景についての洞察と児童・生徒の心理の理解に基づいた介入を具現化することが求められる。スクーリングでは、指導場面を通して実践的な方法について、多面的に学ぶ。事例検討及びカウンセリングの技法を取り入れた体験的な学習とする。
児童心理学	児童心理学	児童心理学
〔 児童発達学特論（Ⅰ） 〕 乳幼児期から児童期の子どもの対象として、子どもの心理学的特性とその発達の変化に関する理解を深めていく。特に子どもの知的発達、社会的認知や言語の発達を中心に考究する。また親や保育者の意識・認識と養育・保育行動の相互関連性を分析し、保育者側のそれらの諸要因と子どもの発達との関連を検討する。それにより保育行動の意味づけに対する理解を深め、保育の在り方を今日的課題の中で研究していく。	〔 児童発達学特論（Ⅱ） 〕 前思春期から青年前期・中期にあたる児童・生徒を対象にその発達の特徴を捉え、青年が抱える問題の心理的・社会的背景を明らかにしながら青年理解の方途を探る。 青年期の問題は、青年を取り巻く社会（家族・学校・メディア等）との関係の中で理解する必要がある。自己意識・対人関係・社会参加に関わる問題を通して具体的な様相を考察し、青年期固有の問題について論究を深めていく。	〔 発達臨床学演習 〕 成人が個体としての独立性・自立性を備えた存在として捉えられるのに対し、臨床発達心理学においては、対象者は環境との相互作用を通して成長する存在であるとの視点（生態学的視点）、またリスク因子も相互作用により形成され変容するとの視点が強調される。本科目では、まず発達臨床心理学の、各発達段階の特徴と環境の特徴を学ぶ。その後、子どもを対象とした各種心理検査を実施し、それらの実施法、解釈法、結果のまとめ方の修得を目指す。
児童心理学	児童心理学	児童福祉・保健学
〔 児童発達評価論 〕 テキストによる学習を通して、①一般的な教育評価についての重要事項（絶対評価と相対評価、形成的評価と総括的評価、個人内評価など）、②学級・学校のアセスメントについての重要事項（学級風土や学級の居心地のよさなど）、③特別なニーズのある児童生徒のアセスメントについての重要事項（WISC-IV等による認知知能のアセスメント、KABC-II等による認知や学力のアセスメントなど）を修得する。	〔 児童発達評価演習 〕 個別心理検査の実施法、解釈法を学び、また、実施した検査結果の解釈に基づき、指導案や指導計画を作成するための演習を行う。本科目では、まず、主に学習面や行動面に困難を示す、小・中・高校の児童生徒の心理教育的アセスメントの方法の概要を知り、すぐれたケースレポートを読むことで、検査結果の解釈法から指導法につなげるための基本的な知識を学ぶ。その後、検査の実施・解釈の実習を行う。	〔 地域福祉学特論 〕 福祉コミュニティについての理論的検討を行い、乳幼児から高齢者まで、地域社会の全住民がそれぞれのライフサイクルで直面する社会生活上のハンディに対する適切な援助と予防、社会参加の権利を保障する地域福祉社会（福祉コミュニティ）形成のための諸活動を学ぶ。とくに社会福祉関係諸機関を中心としたフォーマルな援助システムとボランティアなどのインフォーマルな援助システムを具体的に検討し、福祉コミュニティの在り方を考察する。

児童福祉・保健学 〔 児童生理学特論 〕 子どもはどのように成長発達するかを、4つの段階から考える。1. 胎児期：細胞期を経て、胎芽期にどのように胎児は分化してゆくか。2. 新生児期から幼児期早期まで(三つ子の魂百まで)(自律性の獲得) 3. 幼児期後期から学童まで(高次脳機能の発達)(積極性・自発性の獲得)：思いやり、協調性、自発性などはどのようにして発達してゆくのか。4. 学童期から思春期(生産性・勤勉性の獲得)：子どもはいつから大人の世界に興味を抱くのか。	児童福祉・保健学 〔 児童栄養学特論 〕 子どもの食事は、発育の為に必要な栄養素の摂取のみならず、基本的生活習慣の確立、社会性の獲得に基づく人間関係の養成など、成人とは異なる意義と役割があることを理解することが肝要である。まず基礎として、小児栄養学の基礎について学ぶ。ついで母乳栄養の利点、人工栄養の現状、離乳の意義と進め方、幼児の食行動の発達、子どもの間食の役割、学童・思春期の食生活の問題点、集団給食の役割について理解する。	児童福祉・保健学 〔 児童保健学演習 〕 日本の子どもが直面している健康問題が何であるかを把握し、それぞれについてヘルスプロモーションの立場から「現状および問題点」と「課題および提案」を理解する。またそれを基に、自分自身の研究課題を考えることができるヘルスリテラシーの力を獲得する。
児童文化学 〔 児童文化学特論 〕 児童が享受する文化は、さまざまな新しく生まれるメディアによって媒介されるものが多く、彼らの生み出す文化も、それらによって増幅され彩られる。メディアと児童文化の相互関連性ととともに、過去から未来へと変容することを踏まえて、児童文化および児童文化財の今日的課題について考究する。	児童文化学 〔 児童音楽特論 〕 文化は、伝え受け継いでいく面と、創造し再生していく面とを併せもつ。乳幼児から児童のいわば“子ども時代の文化環境”について、音楽を機軸として捉え、その変化を様々な面から探求していく。具体的には、保育の場での実践を基に子どもの表現活動の持つ意味を探索事例研究と、「リズム」のもつ意味や「教育法」等の時代的变化をみる文献研究の双方を通して、豊かな音楽環境が子どもに与える影響について考察する。	児童文化学 〔 保育表現特講 〕 まずは、保育における「子どもと表現活動の関わり」について発達過程に則して研究をしてもらう。次に、それを受けて内外の文献を基に表現の意義・内容・方法・評価などについて理論的な考察を行う。また、考察を単に理論的なものだけに終始させず、実践的な経験としても活かせるようにするために、保育の実践現場における表現活動について多様な手段を用いて考究する。
児童文化学 〔 保育表現演習 〕 保育表現における子どもの活動について、実践的な場での表現の目標・内容・方法・評価等に関して、理論的・実践的な研究を行うことで、演習を通して実践者としての感性を洗練させるとともに、表現のアイデア開発を行う。あわせて、保育の実践現場等における表現活動の状況について分析・考察等を行い、保育表現の理論や実践について経験的に把握することを目指す。	関連科目 〔 児童臨床教育学演習 〕 援助が必要な子ども達(いじめ・不登校など問題を抱える子ども、情緒的な問題を抱える子ども、発達障害のある子ども等)が、どのような問題を抱えているかを学習する。その子どもにどのような援助が必要なのかを具体的に考える。スクーリングは事例検討会の形式で行い、参加者は自身の体験例を通して、問題の捉え方、考え方、具体的な援助方法を学習することが本講の目標となる。 ※学校心理士受験時のケースレポートに対応。	関連科目 〔 障害児心理学特論 〕 特別支援教育の体制について学び、特別支援学校や小・中学校の特別支援学級および通常学級に在籍する発達障害のある児童・生徒に対する実態把握や支援体制について理解を深める。また、発達障害のある児童・生徒の障害特性を理解し、支援方法の基本を学び、学校現場における事例の支援を検討できる基礎を養う。
関連科目 〔 教育心理学特論 〕 教育現場での具体的な問題に即した教育心理学の知識や考え方を理解し、これに基づいて効果的な学習(保育)指導について考える。この視点から、まず、教育心理学の基本的な知識である学習と記憶のメカニズム、問題解決や知識の獲得について学習し、次いで、動機づけ、学習指導法、教科(知識)の構造化、指導技術、教師と子どもの関係や学級集団等について、授業や保育場面に当てはめて考える。	関連科目 〔 学校心理学特論 〕 一人ひとりの子どもを対象とした心理教育的援助サービスの理論と実践の体系である「学校心理学」について、アセスメント、カウンセリング、コンサルテーション、コーディネーションに焦点をあてて、その方法について学ぶ。また、現代の子どもがもつ学校生活での問題とその援助について検討する。	関連科目 〔 学校カウンセリング 〕 学校という特有な場面で起きている心理的な問題について、学校カウンセリングの視点から理解を深める。学校における援助活動は問題を抱えた児童生徒ばかりではなく、在籍するすべての児童生徒の援助を視野にいれている。そのために、学校カウンセリングの基本的な考え方を学び、援助の目標、対応、プロセスについて検討していく。
関連科目 〔 学校カウンセリング演習 〕 将来学級や適応指導教室などで活かせるように、学校で役立つカウンセリングの4つの理論を学習する。スクーリングでは具体的な事例からロールプレイングを行い、体験を通して、学校カウンセリングに必要な様々な技法を学び、実際の面接で実践できるようにする。ロールプレイング演習を通して体験を行い、学校カウンセリングの事例を中心に、実践で使えるカウンセリング技法を学ぶ。	関連科目 〔 臨床心理学特論 〕 他の心理学領域と比較しながら特に学校で役立つ臨床心理学の特徴を理解する。次いで臨床心理学の理論、臨床心理学の方法、臨床心理学の対象を解説する。特に幼児・児童・生徒の問題にアプローチするためにはどのような臨床心理学的アセスメントがあり、どのように使用するかの理解を求める。最後に認知行動療法やプレイ・セラピーなど具体的治療法についても解説する。	